

# 観光レクリエーション開発の必要性和そのあり方

鈴木 忠 義\*

観光とレクリエーションを並記することは十分に意味がある。観光は旅での体験が主となる。レクリエーションははるかに広い概念で、家でテレビをみていることもレクリエーションとなる。ここで観光と並記したレクリエーションは、スキーとか海水浴のように、日常の生活体験とは異なり、その条件に適した地域にまでかけて楽しむレクリエーションと考える。このようなレクリエーションは、広域レクリエーションまたは資源依存型のレクリエーションといえることができる。

このように、観光レクリエーションを考えると、その資源となるものは、自然や歴史や人間というような、ある地域に定着し、人工で容易に造成し得ないものであることがわかる。そこで、このような資源には限界がありそれを開発し、人間が利用することには、多くの問題が発生する。

今回の小論は、本誌の第56巻第1号(1971年)にも「観光開発における資源の開発と保護」と題してややくわしく述べてあるので、あわせて一読していただければ補充されることとなる。

## 1. 観光レクリエーションの開発文化論

なぜレクリエーションの開発をするかという問に対する答がこれから述べる「開発文化論」である。

### (1) 開発の進展

長い地球と生物の歴史の中で、ごく数千年の間に、人類のみが高度の文明と文化を築いてきた。このことは、人間が他の生物と異なることの証拠である。そのことは脳生理学の時実利彦氏が述べられているように、考え、推理創造していく脳の前頭葉が人間にはよく発達し、他の動物とは著しく異なっている。また、哲学的にはスペインの哲学者オルテガが述べた「人間の本質はつくりだす喜びを体得することだ」ということなどによっても、人間が新しいものを創造し、前進していくということがうらづけられる。

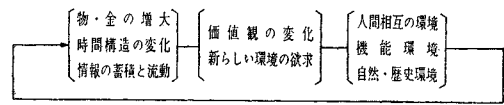
そこで、現実のわれわれ人間の行動を大きく左右する

おもな要素をらとえてみると、それは①物やお金、すなわち文質文明、②時間の使われ方、すなわち時間構造の変化、③人間の中に蓄えられる情報や日常流れてくる情報の3つの要素であろう。

これらの要素が変化すれば、人間の価値観は変化し、新しい環境を求める欲求がその中から生まれる。その欲求を満足すべく多くの開発が行なわれることとなり、新しい環境が生まれる。その行為の中に、人間は創造のよろこびと保守のよろこびを満ちし、人間としての生きがいにもつながることとなる。

そこで、創造についてはさきに簡単に述べたが、保守について、わずかに説明を加えることとする。人間は自分の生命をかけて守りたいものを守り抜いたときに生きがいを感じるものである。個人レベルの問題としては、母親がわが子を守ることや、財産や伝統的な産業や芸能を伝承し保存することもその例である。また社会レベルにおいては、郷土の美しい自然を守るといふようなことはその典型であり、近年における自然保護運動の発端となった尾瀬問題に関する平野長靖氏の死は、その典型ともいえることができる。

以上のことから、開発は一方向的にただ目新しいものをつくりだすだけではなく、守るべきものは守ることであり、それが創造につながることを認識しなければならない。なぜならば、独創的な文化は地方の伝統や風土をふまえたものから生れるもので、他地域から輸入される知識や文明のみにより生まれるものではない。図一はそのような一連の進展の流れとして整理したものである。



創造のよろこび・保守のよろこび

図一 開発の流れ

### (2) 新しく求める環境とは

自然保護の歴史は今日始まったことではない。人間が今日のような技術を手に入れる前までは、むしろ自然保護をすることによって新しい環境をつくりあげてきた。

\* 正会員 農博 東京工業大学教授 工学部社会工学科

“自然をもって自然を制する”という言葉はそのことを十分に物語っている。近代技術の発展による水力発電の開発と自然保護などにより、開発と保護が対立する概念として取上げられてきたが、今日における開発と保護は人間が自然との共存を願い、そのことが人類発展の基本であるという認識である。それゆえ、今後求められる環境は、以下に述べるようなトータルな環境でなければならない。

人間は孤独では生きることができない。それゆえ社会を形成し、集団化する。そのことから、人間は人間相互の環境、すなわち物の考え方や価値観の類似している人々とは生活しやすいこととなる。このような環境をまずもって人間的環境と呼ぶこととする。

次に、文明国であるわが国においては、多種多様な高度な職業が存在し、また生存していくためには、医療や住宅なども整備されねばならないし、各種の人間開発のための教育文化の諸施設が必要となる。また、自己の能力発揮の機会として、気ばらしとしてレクリエーション空間も必要となる。これら、職業、生存、人間開発、レクリエーションなどの諸施設の開発は、まさにその地域に人間が定着するための機能である。それゆえ、これらを統合して、機能環境と呼ぶこととする。

最後に、人間の生存のベースとして、また独創的な文化創造のベースとして、自然や歴史があらゆる空間開発の中に尊重されなければならない。そこで、これらを自然歴史環境と呼ぶこととする。

そこで、以上の人間的環境、機能環境、自然歴史環境を 図-2 のように集約されたものが人間のトータルな環境であり、これこそ人間性と文化創造の環境である。この環境の創造を求めていくことが、ほんとうの開発である。

### (3) 観光レクリエーション開発

開発はトータルな環境創造であると述べたが、観光レ

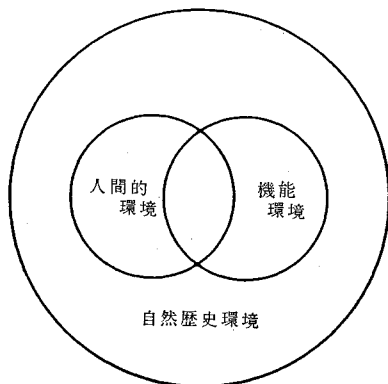


図-2 トータルな人間環境

クリエーションはこの中でどのように位置づけされるであろうか。観光は旅という体験的な行為の中に非日常性を求め、自分の人間開発に直接的・効果的に作用する。あるときには世界観や人生観を変化させるような強い影響もあるし、思考を変化させることもある。レクリエーション活動も、教養的、創作的、活動的、娯乐的、奉仕的など、その内容の充実をはかるならば、人間の能力発揮と人間性を享受する絶好のチャンスである。その意味において、働く時間と休日時間とがほぼ同じ時間構造になろうとしている今日においては、この休日時間をどう使い、どう結晶させるかということが、個人にとっても、社会にとっても、きわめて重要なこととなってきた。

そこで、この方面の空間や施設の開発は人間の根本問題に直結するという認識にたつて観光レクリエーションの目的に合った開発を急がなければならない。

## 2. 観光レクリエーション開発のあり方

開発を考えていくことは、開発計画を立案していくことである。そこで、計画には計画の主体、目的、対象、手段構成(員)という要素が存在する。主体と目的は需要となり、対象と手段は供給となる。構成は計画を考え推進していく人々の集団とする。

計画の主体には、大別して利用者と地域住民と起業者の三者が存在する。それゆえ、これら三者のサイドから計画を検討することが必要である。起業者の利潤追求のみを満足するような開発は絶対に許されない。また、地域住民が、いろいろな角度から参加しうるような開発計画でなければならない。

一方、供給において大切なことは、資源の有効利用(資源をあますことなく使いきるという意味ではない)と恒続利用である。観光レクリエーションの資源評価は自然や歴史や人間にあり、これらは、いずれも容易に人工や経済でつくることのできない資源である。それゆえ、この資源を保護育成していくような開発でなければ、その開発はその地域にとって自殺行為といわなければならない。

そこで、観光レクリエーション開発には、いくつかの開発の態度が存在する。利用者を主体とした利便論・効果論、地域住民を主体とした利便論・効果論、企業を主体とした需給論・利便論・利潤論・容量論・適性規模論などが存在する。

しかし、さきにも述べたように、三者の主体と、対象としての資源の恒続利用、観光レクリエーション開発の意義などを総合した開発の態度がとられることが開発の正しいあり方である。その意味において、本質論・総合論が、開発には追求されなければならないのである。